

第3回 香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略策定委員会 議事録

- 開催日時：令和3年2月18日（木）10:00～11:30
- 開催場所：香南市市役所7階 議員控え室
- 出席委員：受田浩之委員長、田内修二副委員長、竹内淳委員、岡林八重美委員、宮崎利博委員、中脇正人委員、古川和佳委員、田中愉之委員、長崎篤史委員、百田年真委員、水田貴士委員、國松美紀委員、土居秀臣委員
- 事務局：岡林商工観光課長、前川こども課長、岩田地域支援課長、小松農林水産課長補佐、西内企画財政課長、門脇企画財政課長補佐、田淵、中川

【次第】

1. 開会
2. 委員長あいさつ
3. 議事
 - (1) 令和2年度の目標達成状況（進捗状況）及び令和3年度の新たな取り組みについて
 - (2) 第2期香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略の改訂について
 - (3) 「魅力ある香南市をつくるアンケート」概要報告について

- 事務局
 - (1) 令和2年度の目標達成状況（進捗状況）及び令和3年度の新たな取り組みについて説明
 - (2) 第2期香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略の改訂について説明

- 委員長
令和2年度の進捗の数字で明らかな部分をご紹介いただき、それらに基づいて令和3年度の取り組みに関して、特に新たな取り組みとしていくつかご紹介いただいた。それらのことを基に、第2期の具体的な資料2の内容についてご説明をいただいた。今日ご出席の委員の皆様の中には産業振興計画や人生支援計画の部会の委員をされている方がいらっしゃる。それぞれの会議の様子を担当課長より説明いただいたが、細かい内容についてもご理解いただき、ご意見をその場でもお出しになったと思う。全体的な部分、あるいは横串を刺していく部分、さらには盛り込まれていない評価をすべき内容等、まだまだたくさんお考えがあると思うので、まずは一通り今の説明を受けて委員の皆様よりご質問やご意見をいただきたい。なお、この後アンケートの話があって多分に今の説明とも繋がっていく内容は盛り込まれているので、ここで出し尽くすという形ではなく、いくつかご質問やご意見をいただいた上で、後半のアンケートの説明もいただきつつ、一括で議論を深めたいと思う。

■委員 個別の意見になるが、資料1-4で新規工業団地の整備をするにあたり5箇所の候補地の抽出を行なったとあり、一定進んでいる気がする。令和3年度の取り組みで、造成基本設計を実施していくとあるが、令和3年度内に候補地を絞り込んで行くのかということと、分譲をいつから始めるのかということ。かなり先の話で分からないと思うが、この計画自体が2060年までの長期計画であることから、当然その間にいつ分譲して、その結果製造品出荷額がこれぐらい見込まれる、あるいは新規雇用者数がこれぐらい見込まれるということで初めてこの計画の基礎になり、数値計算できるようなものになると思う。色々な要素があり難しいとは思いますが、どこかの時点でいつ分譲するか明記することが必要ではないか。

■事務局 工業団地の件については、現在5箇所の候補地がでていいる。5箇所の候補地において、面積・工事費・アクセスの視点から検討を行っており、順調に行けば年度内か新年度当初頃に絞り込みを行いたいと考えている。絞り込みを行った後、造成基本設計を実施する。今までの例でいうと分譲については5年～6年はかかる、まずは地元の地権者の同意に時間がかかる。それが終われば実施設計・工事へと着手する。

■委員長 2060年を意識しながら仕事をどう作るか、その場所としてこういったところを計画的に考えていかなければならない。コロナ禍を受け、先ほど産業振興計画の中で触れさせていただいたように、働き方や生活そのものがどのように変わって行くか、劇的に我々の想像力を超えた変革がおこる可能性がある。したがって工業分野における新規工業団地の役割であったり、誘致企業そのものが一体どんな業態でどういった産業へ関わっているかなどの内容的な部分もイメージしながら進めていかなければならない。今回のコロナ禍を受け、場所の概念が変わったことから、場を造りましたということだけでは不十分である。グローバルに視線を上げて行って予測をしながら我々としてあるべき姿をイメージしていかなければならない。非常に難しい立場であることは間違いない。先ほどワーケーションの話もあり、それから東京という働く場所と香南市という居住地が一体化していくこともありうる。東京の企業は、具体的にオフィスがいなくなっている。その賃貸料がいらないことが分かった。それをどう使うかというところで地方に分散したオフィスや居住地を考えることは現実的な選択肢になってきている。一方である企業は、それでも集まるという価値を非常に重視している。そんな考え方で見ていった時に、以前から空港に近いといった立地も活かせる。色々なシチュエーションがあり得るということで想像を膨らましていき、色々なタイプに備えて常に意識しておかなければならない。

■委員 全体的なことであるが、先日勉強会に参加した時に、ある外国人の親子が日本に来て子どもが日本に障害者はいないのかと言った。なぜかと言うと町を歩いていても障害を持った人を見かけない、実情はでれていないということがある。総合戦略の中にも障害のある方、障害者といったキーワードがでてこない。せつかくなので障害を持った方が

まちを歩けるようなやさしい町を目指し、戦略の中にそのようなキーワードを入れて行く必要があるのではないか。外国人という言葉もでてきていない、グローバル化してきているこれからに向けて、戦略的に進めて行かなければならないと思う。

■事務局 人生支援の方では外国人とのコミュニケーションという所が部会にも上がっている。これは香南市に働きに来る外国人のこどもさんの保護者とのコミュニケーションという観点から上がっている。最終的には幼年就学期部会だけで取り組むではなく全ステージにおいて各部会を通して来年度から取り組むこととしている。多文化共生社会への取り組みとして、まず来年度は日本語教室の開催などを考えており、外国人との関わりにおいて人生支援計画でしっかり取り組んでいく。また障害者については、おっしゃるとおりご意見が出にくい所であります。人生支援計画の中でも指標をもてていないところがある。今日頂いたご意見を持ち帰り部会にも共有する。

■委員 人生支援計画の委員に障害を持たれている方や外国人に入ってもらったらどうか。

■委員長 先日ヤ・シィパークで企画されたのを拝見した。まさにあの様な取り組み、砂浜ビーチに障害を持った方が行ける環境を作ることがすばらしいと思った。

■委員 ニュースや新聞で掲載いただいた。DMO協議会で観光庁の事業を活用し、DMO協議会本来の業務と別だてで採択を受けて実施した。海の駅クラブとヤ・シィパークに協力いただき、四国初のユニバーサルビーチを作っていく活動を進めてきた。これは観光庁の事業だけではなく、高知県おもてなし課の事業から最初は起こっているもので、これを3年くらい検証したうえで、ヤ・シィパークを活用したビーチのコンテンツの体験というものもしっかりと作っていく中で、ロケーションがすごくいい所なので、色々な方に情報発信のコンテンツとしては、すごく四国初という言葉が全国にも響きやすいということと、全国でユニバーサルビーチというところが、神戸の須磨にしかないので、整備をしていくことに関して四国初という所を狙って戦略を立てているものになる。今年の夏には完成させて、しっかりと旅行商品として販売していくことは目的の一つである。これは香南市のおおきなPRということを念頭においた活動をしている。この環境や立地を活用しての移住や働き方改革での企業誘致にも活用ができる。場所を見せる、アクセスが良いということ在全国発信するだけでシフトして行くと思うので、その狙いを集約したものになる。ビーチというだけの狙いではない。これについてはしっかりと作り込んでいくことで、観光庁の事業が3月末までであるので、これをDMO協議会の事業の一つの柱にして香南市から発信していく。2市についてもユニバーサルビーチではなく、色々な障害を持ちの方々が観光しやすい場所、生活しやすい場所ということ香南市から発信するという形で戦略を立てているところである。人生設計という中で観光の視点から申し上げますと、総合戦略改訂版にSDGsの件が入っているが、これについては旅行の分野についても注目されており、SDGsの目標に取り組む旅行商品が、

今後は修学旅行に採用されるような傾向にあるという情報共有がされている。SDGsとかまちづくりが子どもの学習要領の中に入っているところもたくさんある。まちづくりの内容が小学生5年生か6年生の教科書に入っている。子どもたちが自分が住んでいる町に興味がある、その市がSDGsにどのように取り組んでいるかということに興味があって、しっかりと生活の中に入れていくということが、これからの学校教育の中にも入ってくると考えられている。その専門家の方々からは、やはり修学旅行が今後採用されるのはSDGsに取り組んでいる項目がないと難しいと言われている。商品開発の部分については、このような部分も注力しないと考えている。ユニバーサルビーチもそうだが、すべてのことを関連付けて行くことが必要と思っている。

■委員長 大事なことを両委員から発言いただいた。「インクルーシブ」という言葉があるが、あらゆる立場の方々を尊重し、ある場合は寄り添い、そしてともにコミュニティを維持していくという点を最大限意識し続けること、SDGsのコンセプトはまさにそこにあるといっても過言ではない。この委員会の委員構成も他の自治体と比べて多様に構成されていると思っているが、さらに先ほど障害を持っている方の話が出たが、ほんとうにやさしい町であるためには、そういった方々を含め、生の声をしっかりと聞きし、それを受け止めて改善に繋げるという所が市を代表するようなこういう協議の場であればいい。そのことが市にとっての基本的なスタンスになって行く。それを具体化するのにユニバーサルビーチの考え方であったり、象徴的な取り組みが幾つもあったり、それが全部シームレスに繋がって行って、やさしさにみなぎる町になっているのが目指すべき姿ということになると思う。この点はアンケートにも自由な意見でいくつも見られるのでそこに話を繋げていきたい。

■事務局 (3)「魅力ある香南市をつくるアンケート」概要報告について説明。

■委員長 今回アンケート調査は特に年代を小学校6年生・中学校3年生・18歳別々に集計していることが一つミソだと思う。さらに5年間に渡ってこれを定点でモニターをすると3年経てばそれぞれが次の上の層に上がって行って、つまりこの6年生で伺った質問に対する答えが、その子どもたちが3年経って成長した時にどのように意識の変化が生じたかがわかる。同時に、まち・ひと・しごと創生総合戦略の施策によるインパクトが子どもたちの意識にどう影響を与えたかをある程度相関付けていくこともできるかもしれない。基礎資料として今後活用していく上で価値のあるもので、また市長もご覧になられて市の行政として舵取りをして行く立場で市をどういうふうにすればいいのか市民の多様な意見が非常にちりばめられている。それぞれ目の付け所が違っていると思う。中協委員からお出しいただいた意見等がこのようなものとなった。是非コメントをいただきたい。

■委員 アンケートを見た時に、ずっと香南市に住み続けたいというマイナスになるという点

というか、仕事とかウエイトが大きいと思うが、それが今後テレワークとかでどのように今後変わって行くのか、子どもたちはだいたい香南市に居たいと思うが、息子の県外の友達も仕事を辞めて高知へ帰ってきたりとか、そういったニーズもたくさんあるので今後はテレワークとかがどうなるのか、香南市としてもそういったことをやっていかなければいけないと思う。全体的なことで、香南市といえば海山川、ヨットも、サイクリングもあって空港も近い、ものすごいコンテンツがある更に温暖である。そこをアピールするに移住者の方で、とりあえず香南市に住んだっていうのを人生支援計画の会議の中で聞いた。その人たちに香南市がもっと尖がってアピールしてもいいんじゃないかと思う。それと交流人口と関係人口を増やして行く、津野町ではだいぶ前から国の指定を受け東京農業大学の方と関係人口を増やしている。関係人口を増やすことで香南市に来ようかと思う人もでてくると思う。このコロナでパラダイムシフトがおこっていくのでこのパラダイムシフトを利用して、尖がって行けばこれだけ香南市はなんでも揃っているわけだから、ある面ではコロナが千載一遇のチャンスとして必死でアピールしていけば見えてくると思う。

■委員

このアンケート結果を見て、香南市に住みたい理由で小学生の子たちがあげている。生まれ育った場所だからとか、家族がいるからといった意見がある。あらためて幾つになっても香南市に住みたいとか、戻ってきたいという一番の根底になるところだなと思った。移住のところで色々な話をする中で、香南市は意外と便利でという理由があるが結局大人になってからの後付けであって、根底には家族がいて生まれ育った場所だからこそ住みたいんだと改めてアンケートを通して気が付いた。自分自身も県外へ出たが、最初に家族がいて住みたい場所であったが、もっと便利な場所とか、楽しい所だと思うと魅力のある県外へと出てしまう。外に出ると香南市の良さを改めて気が付く。だからこそ戻ってきたいと思うようになる。今後はIT化が進み仕事も香南市でできるようになり、買い物したいと思ってもネットですぐ注文でき、すぐに届く時代なので、香南市に戻ってくる、香南市で住み続けるというハードルは今までより低くなってくると思う。子どもに香南市を好きだという気持ちをもっともっと強く持ってもらえば、香南市に住み続けたり、戻ってくる人口は必ず増えてくると思う。子どもたちが香南市になにを望んでいるのか、そういう所をアンケートからしっかり拾って実現していけばと思う。人生支援計画の中でもでていたように公園を造ってほしいという意見もこのアンケートにもたくさんでてきましたので、是非実現して頂いて、アンケートから意見が出て、それが実際に実施されたことを子どもたちにフィードバックをしたら、自分たちで町をより良くしたんだという思いを強く持ってもらえると思う。

■委員長

パラダイムシフトという言葉がある。便利とは何か、公園の機能、子どもたちが期待している公園とは何なのか、何故を繰り返していく必要があるのではないかと、これがパラダイムシフトに対する答えと結びついていく可能性がある。中を見るとディズニーランドのような公園がほしいというような記述もあるが、おそらく答えている子どもたち

の立場からすると、そういうものではなく、求めているのはもっと違う本質的なものかもしれない。これらを今後追及していく必要がある。これが将来に繋がっていくこと、地元を好きになるということをどのように考えていくか、生まれ育った場所を好きというのは本能的なもので、これは失われていくからそれを後で補わなければならないということを示唆しているような気がする。地元学とか地元愛というものをどうやって醸成するかという視点ではなく、子どもたちが地元を好きで在り続けるように我々は子供たちに何を伝えていくかを考えていかなければならない。そのヒントとしてアンケートにはお祭りのことも入っていると思う。どうお感じになられたか。

■委員

地元と言うことであるが、私は母の里の徳王子に住んでいる。赤岡で生まれて今も赤岡で仕事もしている。都会にも住んでいた。地元とは難しいキーワードである。水産業がコロナによって打撃を受けているが、テレワークという話題が出ているが、テレワークに向いている業種と、そうではない業種がある。祭りもどろめ祭りも中止となった。自分が子どものころは地引網などの体験もあった。子どもがユーチューバーになりたいとかテレワークの仕事に向くのも大事だが、昔のように子どもにもっと水産に関わることを体験してもらいたい。令和3年度の取り組みの漁船導入支援事業を利用して水産業の強化を図ってもらいたい。シラスやシイラの加工品に力を入れてもらいたい。吉川の天然色市場が再開するようだが、そこで子どもたちが海の物に触れられるように、またぬたなどの作り方など教えてもらいたい。

■委員長

そういう季節ごとのお祭りや様々な行事が子どもたちの地元に対する愛情を深めていく、そこには産業も一緒になっているところがポイントで、今は水産業についてお話をいただいた。農業に関する捉え方も子どもたちから見てあると思うが、どうお感じになられたか。

■委員

農業に関しましては、小学校3年生4年生を対象に、色々な農業体験を行なっている。有名なのはピーマン、ししとうであるがピーマンが嫌いな子どもが収穫して家に持ち帰りお母さんに料理してもらおうと全部食べる。子どもがもっと欲しいと言ってくることもある。そういった食育体験をしているが、香南市で問題になっているのは新規就農者の問題である。新規就農者は目標数値に達しているが、この追跡調査をしていかないと大変なことになると思っている。一人新規就農した後に離農した。そのようなこともあるので、栽培の技術は教えるが経営に関しての教えが足りていない。今出ている公園の話だが、子どもの公園捉え方がちょっと分からない。自分が子どものころは物部川の河川敷や三宝山は公園であった。三宝山に関しては、産業振興計画の会やこの会で香南市のシンボル是三宝山だと言い続けている。やっと三宝山の開発計画が進みうれしい限りで、頂上の開発も進めてほしい。私も高齢者になり高齢者の気持ちが分かるようになり、高齢者の支援という言葉を聞くと嬉しくなる。障害を持たれた方や外国人に委員になってもらうという意見はとても新鮮である。

- 委員 アンケートの調査で香南市の農業・林業・水産業は魅力的ですかという所で魅力的だと答えているのが全体的に63.2%とある程度魅力を感じている。18歳以上になると魅力意識が薄れてきている。子どもの頃には山北みかんや夜須のトマト、メロンなど美味しいと感じていたが大人になるにつれて魅力が薄れてきている。子どもの頃にはそれらのものが美味しいというイメージがあるが、大人になると果物離れ、一人暮らしすると買えないなどの理由があると思う。そういったことで明確に数値が出てきている。その改善のために、アンケート調査をより砕いて調査してみてもいいのではないかとと思う。こういうアンケートはいい情報になる、これ見て我々はどう発信していかなければならないか新たに考えなければならない。
- 委員長 今回の発信という話で國松委員に、経営という所では水田委員に、土居委員は県としての立場もあるのでそれぞれのお立場で順番にお願いしたい。情報の発信という所は非常に重要である。
- 委員 昨年はコロナの影響により様々な行事がなくなった。香南ケーブルテレビとしてできること、しなくてはならないことを考えた。高齢者に対しては、家でできる簡単な体操を作り、子ども達も外で遊べない自粛期間中にでも親子で遊びながらできる体操を作った。マスクも不足していた時期に社会福祉協議会に協力をいただきマスクを作ったりもした。市内の商店や飲食店のテイクアウト情報を発信し、市役所からの情報発信依頼に対し迅速に対応してきた。市役所だけでなく様々な方にケーブルテレビを使ってもらい情報発信していきたいと考えている。仕事でもZOOMで会議をするようになり、どんどん変わってきたように思う。アンケートを見ると香南市が良く、住みやすい所と感じているのが伝わってきた。県外の大学で学び、香南市に帰ってきたいと思っても仕事がないと帰ってこれないと思う。企業の誘致とか、香南市に住みながらテレワークで働けるとかそのようなことを進めてもらいたい。また、子どもや高齢者が地域との繋がりがなくなるような取り組みを進めて行かなければならないと思う。
- 委員長 情報を発信するということは、人と人との繋がりを具体的に強めて行ったり、新たに結びつきを築いて行ったり、そういう意味で絶対必要である。その中身として今様々な話がでてきているように、各地で行われている行事が相当なウエイトがあるということが分かる。あと仕事系の面で県の施策であったり、金融機関のお立場でコメントをいただきたいと思う。
- 委員 さきほど新規就農者の方が離農したという話があった。やはり事業なので利益を出さないと継続していかない。農業をやりたいという想いだけでは続かない所があるので、入口の段階で経営の部分についての相談会や資料を提供していく必要があると思う。

■委員 農業の関係のお話の続きになるが、就農支援であるとか、もちろん技術だけではなくて経営的な部分も含めて県の農業振興センターの方で取り組んでいるが、まだまだ足りていない部分もあるので、今日のお話につきましてはセンターに持ち帰って伝えたいと思う。岩田課長の人生支援計画の報告の中で、移住者の交流ということでコワーキングスペースの話が出ておりました。移住者の交流もそうですし、地域の方との交流もありますし、企業さんの交流の場としても当然使っていける。テレワークの話もでていますが、自宅からではなくて関係する従業員の方が複数集まるとなると当然そのようなスペースは必要となってくる。また企業誘致自体もリモートで営業活動をやっているという状況もある。企業誘致の話を進めて行く上で本社からの視察という形が出てきた時に、ちょっとした事務スペースがあると、市内を見るだけではなく事務的なことを本社とやり取りできるスペースがあるといいと企業立地課から聞いている。香南市には香南工業団地があり、また新しい工業団地も造っていくことになっているが、工業団地を造った場合に県外からの企業誘致だけではなく、県内企業さんで特に高知市においては南海トラフ巨大地震における津波浸水区域に数多くの企業さんがいますので、移転先を多く探していますからそういった企業さんも入ってくることが想定される。今現在香南工業団地にも大阪の企業さんが2社いますが、その大阪本社から来た時に工場での作業だけじゃなくて、宿泊先であったりとか、宿泊先以外で仕事をしたりとかなどの場所に使えるので、是非とも香南市にコワーキングスペースの設置に向けて前向きに検討していただきたい。そういうスペースがあれば県の企業誘致についても活用させていただきたい。

■委員 県が進めているIOPについて、これは慎重にしないと高知県農業者の9割以上が高齢者ですので、これを一握りの若い方々だけに進めて行きますと、高齢者の方々から不満がでる。この点に気を付けて進めないといけないと思う。

■委員長 どう繋げていき、持続できるようにするのかを考えながらやっていかなければならないと思う。

■委員 働き方改革と冒頭にあったが、働き方改革があつて生活様式がもう既に変わっている。分散型になっているという風に見ると、施策をしく時にもどういう風にどの方々とどういう連携の取り方をとるかということで、大きく一つのまとまり方が変わってくるという風を感じている。分散型になるということはまとまりづらい部分が出てくるということがあるので、ここが市の持っている力なんだと感じる。私も香南市に住んでいるので、そういうところを今後期待できるんだなと考えているところである。ひとつ働き方改革のなかで、今までのように企業に携わっていれば副業ができないところが多かったが、コロナで副業可のところが増えてきたと思う。それは大手企業でもかなりの割合で副業ができるようになってきているということは、こちらの方にお越しになっている方、農業や漁業などいろんな分野での副業が可能になったということだと解釈ができると思っている。私も少し時間ができるようになったので、農地を借りて農業をしようかとい

う算段をしているところまで、それも兼業でやろうかという風になっている。専業でいろいろ農家や漁業をするだけではなくて、兼業でも仕事ができるという方も多くいらっしゃると思う。そういうハードルが低く、兼業でも簡単にできるんですよというような窓口があれば、ちょっと相談に乗っていただきたいというようなところも考えられるんじゃないかなと今までのお話を伺いながら思ったところである。あと、香南市にしながらも首都圏の仕事ができるところに関しては、もうずっと思っている。学校教育、高知にいても首都圏のいろんな大手企業の仕事が地方にいてもできるというような能力をつけさせる、つけていくということが大人が子どもに与えてあげられることなのかなと思っているの、またそのあたりについてもご検討いただけたらと思っている。

■委員長

これまで農林水、商工、観光、住宅という風に分けていたこと自体、もはやこのコロナ禍を受けて今後ということを考えて時には、ある意味議論が収まらない可能性もある。そして、一人が副業を含めて何役も勤めていき、そして軸足をどこに置くかということ自体も、もはや一か所ではないという時代になってきている。このあたりで多様なメンバーがしっかり未来を描いていくような議論の場を設けることが必要。そこには多様なメンバーが当然入っていく。そういうプロセスを描けるような自治体であれば、コミュニティの希薄化や人と人とのつながりが徐々になくなっていくことを防いで行けるかもしれない。今回のアンケートを基に、また議論の場を作っていただくというのもひとつの提案かと思う。それと教育の話もあったが、私も大学に席を置いて日々苦悩をしている。例えば留学をするということが非常に困難になっていて、オンライン留学が当たり前になりそうである。そこに行かなくても、学籍をもらって、そしてオンラインで単位を取って卒業する。アメリカでミネルヴァ大学が一番有名で、キャンパスを持たないという話が数年前から非常にメディアを騒がせていましたが、もう既にこうなりつつある。従って「香南市から18歳で大学に進学するから故郷を離れる」というのはありえない世界になるかもしれない。生まれたところで世界中のその教育コンテンツは手に入る。学歴やそういった魅力的な教育は受けられる。逆に言うと我々が考えておかねばならないのは、競争相手が世界に広がったということである。そのなかで特徴を出していくには、より競争が熾烈であるが故にマーケティングの戦略も含めてしっかり描いていかないといけない。内部に子どもたちが非常に魅力を感じてここに住みたいと思ってくれている、その子どもたちの前にもコンテンツとして世界レベルのものが広がっている。そうすると魅力と外に出たいという気持ちのせめぎ合いはより熾烈になるかもしれない。そういうところも含めて今回のアンケート、また第2期の改訂に向かって更に産業振興計画並びに人生支援計画、両者を含めて徹底的な議論を更にし続けていくということが今日またひとつ見えてきたような気がする。そして前段、多様な方々がいらっしゃるコミュニティというところの意識を形でもお示ししないといけないという非常に大切なお意見を頂いた。また、皆さんからお出しただけなご意見等は事務局にお寄せいただいて更に次に繋げていくということでご了承いただければと思う。

4. その他

- (1) 策定委員の任期満了等について

5. 閉会